

文字摺通信

第 76 号

2024年11月15日

発行:文字摺歴史文化社

文知摺観音傳光閣で

芭蕉の真蹟句文懐紙「早苗つかむ」を

久しぶりに文知摺観音を訪れ、史料館「傳光閣」を観覧してきました。入口を入って、右側が企画展示室では俳人加藤楸邨と本宮の画人鈴木宗吉のコラボ展を開催。左側の常設展示室は普門院所蔵のお宝いっぱいのお宝展示をしています。福島市指定文化財の福島藩主奉納の絵馬3点を始め、境内にある句碑・歌碑の拓本も展示されています。そして、松尾芭蕉の真蹟句文懐紙の軸が展示されていたことに初めて気がつきました。

『おくのほそ道図譜』（尾形侑・森川昭監修。朝日新聞社刊）に「さなへつかむ」句文懐紙が7点載っています。芭蕉が文知摺に来て詠んだ句は、推敲に推敲を重ねて作品として出した最終形は「早苗とる 手もとや昔信夫摺」ですが、最初の形は、『曾良旅日記』にある「五月乙女に しかた望ん しのぶ摺」で、次にこの句文懐紙にある「早苗つかむ 手もとやむかし しのぶ摺」です。句の前書は「もち摺の石は福嶋の駅東一里はかり山口といふ処に有いまはちかやの下埋て其形わつかにみえ侍れば はせ越」とある。『おくのほそ道図譜』の注には「前書は文字摺句中最も簡略で旅中の染筆か。新出資料」とある。『おくのほそ道』では「明くれは しのぶもち摺の石を尋ねて信夫の里に行く 遥か山陰の小里に 石半は埋もれてあり。里のわらべの来りて」と続く。句文懐紙の前書も推敲を重ねて本文につながったのであろう。なお、この句文懐紙には、前文の頭に印（不耐秋）、最後に二つの印（桃・青）が押されている。

我が家の近所の文知摺観音で芭蕉の真筆を見ることができるとは思っていなかったが、今回『おくのほそ道図譜』で確認できたことは大きな成果である。芭蕉はこうした句文懐紙をサラッと書いて、スポンサーに置いてきたのであろう。芭蕉にとって俳諧発句は職業だったと確認できる資料である。

